

商大での日々

宝 福 則 子

小樽で生まれ、育って、その故郷の小樽商大の教員となってから23年間、今年3月末の退職まで、無事にその職業生活を続けることができました。その間、教職員の同僚の皆さんには陰に日向にお世話になりました。また、今回、私の特認名誉教授の称号授与を記念する『人文研究』を刊行して下さるとのこと、感謝申し上げます。

在任中は、たくさんの心優しき同僚の皆さんに恵まれました。すでに退職された同年代の女性職員たちや転出していった若い教員の同僚たちとも良き友人として付き合いが続いています。小さい大学だから、学科や職域を超えて、いろいろな同僚と知り合うことができました。

赴任してから、最初の頃は、教職員組合を通じて、終業後、キャンパスの桜の木の下でのお花見などがあり、ジンギスカンにお酒も入り、教員とだけでなく、事務職員の同僚たちとも遠慮のない付き合いができました。残念なことに、繁忙化？ や不祥事等によって、こういうこともできなくなって久しいですが、これは学内の風通しを良くするのに、大いに貢献していたでしょうし、小樽商大の良き校風だったのだらうと思っています。

私は、平成2年(1990)4月に小樽商大短期大学部に赴任し、その後すぐに改組があって、短大部がなくなり、その代わりに夜間主コースができて、私は学部の所属になりました。

この間、学内のいろいろな場面で、さまざまな出会いがありました。まずは、学生ですが、やはり基礎ゼミの学生とゼミ生とは濃密に付き合っ

だけに、彼らの中には、それぞれに意味合いはちがっても、非常に印象深い人々がたくさんいます。

そして、同じ学生でも90年代末に「えこぶらん」という環境サークル活動を共にした学生たちと柴山先生がいます。学外からも、私の高校時代のテニス仲間だった友人の近藤さんや山本さんが、この活動に参加してくれて、共にサポートしてくれました。

1996年から1997年にかけての1年半のドイツでの在外研修を終えて帰国した当時、小樽ではゴミの分別をしていなかったのですが、それを見るのが非常に苦痛でした。柴山先生も分別収集が実施されていた東京から赴任して来て、大学内のゴミが全て一緒に捨てられているのを見て、違和感を感じているということから、分別用のゴミ箱を用意してもらおうと話したのが、この環境サークルの発端でした。

分別作業もですが、当時、まだ普及していなかったエコバックをミシンで手作りして販売するとか、今から考えると、時間的にも、体力的にも、ものすごいエネルギーを注ぎました。非常に集中的に学生と接したので、学生を知るという意味では、この活動は私にとって大変、良いことでした。私の知らない、今時の学生の問題というか、悩みみたいなものも身近に知りました。

次に私の商大時代の研究テーマについて述べますが、テーマには変遷がありました。赴任当初の研究テーマは、それまでと同様、ドイツ・マールブルクのフィリップス大学での学生時代からの「発展途上国における経済発展-非発展について」でした。その後、「発展途上国の環境破壊」ということを先進国との関連で考えるようになりました。

1994年に「アマゾンの熱帯雨林の破壊」について論文を書きましたが、そんな時に、再び、ドイツに行って、勉強する機会が与えられたのです。この時は、カッセル総合大学に行きました。この大学は、E. U. v. ヴァイツゼッカーがその前年まで学長をしていた大学で、かれは1992年にリオ・デ・ジャネイロで開催された環境サミットのドイツ代表として活躍した人です。

だから、カッセルの大学は社会科学系の環境分野の研究が非常に進んでいました。

ちょうど、カッセルでは、私を受け入れてくれた旧知の K. ティヤーデン教授も、すでにそのずっと以前から廃棄物処理の政策的な研究をしており、又、ドイツでは、丁度、1996 年から新廃棄物法が施行されることになっていたために、カッセルでも、シンポジウムや、いろいろな企業、特に生産工場の現場のリーダーを対象とした講習会なども開催されていて、非常に興味深く、私も教授について行って、それらに参加させてもらいました。つまり、法令の解釈と、その実際の生産現場である工場での取り扱い等を具体的に知ることもできました。

またティヤーデン教授グループの Dr. B. リーフ（経済学）、Dr. P. ストルツィンスキー（社会学）のゼミにも参加できました。特に Dr. リーフには、ゼミの後、専門的な法令用語や自然科学系に属する用語など、理解できないことなどを、キャンパスのカフェでコーヒーを飲みながら質問すると、丁寧に説明してもらうのが常でした。

熱帯雨林の破壊に関しては、発展途上国の専門家で、ラテン・アメリカに長期滞在しながら調査を続けていた、C. ミュラー・プランテンベルクという女性の教授のゼミに出ることもできて、ラッキーでした。ちなみに、彼女は私が学生の頃から輝いていた、あこがれの女性研究者でした。

また、少し離れた、電車で 30 分ほどの所に農学部のキャンパスもあって、ここには海外、特にアジアの熱帯雨林の調査を恒常的に続けているプロジェクトがあり、ここでも、いろいろな分野で触発される学際的なシンポジウムが開催されました。

カッセルでは、まとめると、先進国での「新廃棄物処理法」と「熱帯雨林の破壊」についての二つのテーマを主としてゼミに参加しました。学生時代に戻って、若い学生と一緒に机を並べて、1 コマ 2 時間のものを午前中に 2 コマ続けるゼミが 2 つあったり、環境や法律といった私にとっては新しい分野の専門用語がわからなかったり、苦労はしましたが、このカッセルでの滞

在中は集中的な研究ができました。

一年半の滞在の後、上記二つのテーマで勉強した成果を論文にしました。これと、並行して、歴史学で「オーラル・ヒストリー」というジャンルがありますが、このところ、ほぼ10年間強くらいは、オーラル・ヒストリーの成果を論文にして『人文研究』に掲載してもらっていました。これは、私の社会経済史の教授だったG. ハールダッハのプロジェクトが、ドイツのブラウンシュヴァイクという町で1900年から1933年まで暮らしていたことがある労働者をインタビューして、それをカセットテープに録音し、書き起こした資料があるのですが、それを先生が私に貸してくれたのです。1980年にインタビューして、まだ生きている人のプライバシーを守るため、30年間、文書館に入れていました。それを商大に赴任した年にマールブルクの大学に先生を訪ねた際に、貸してくれたのです。私に対する就職のお祝いということでした。日本で使う限り、問題は無いだろうからということで、貸してくれたのですが、これを分析して、インタビューされた人のプロフィールを描写するという作業をしました。

この分析作業のために、まず、行為理論を応用して自分なりの分析方法を設定しました。これまで被インタビューー26名分の内、2〜3名一緒のインタビューの場合もあるのですが、それらを15の論文にまとめました。ドイツは伝統的に地方分権の国で、このインタビューが実施された1980年に、インタビューを受けた人たちは年寄りですし、その書き起こし原稿には、ブラウンシュヴァイクの周辺の地方独特の方言や階層独特の言い回し等が、そのまま記載されています。標準語でドイツ語の勉強をした私には難しい表現も多く、自分でどうしても調べきれない場合は、ドイツに行ったときに、それらの意味を教えてもらい、翻訳しました。ニュアンスも含め、やっと解釈し終えて、分析している内に、使えないインタビューということがわかることもあるので、そうなると、ガックリしますが、多分、これで、この作業は終わりにしても良いかとは思っています。

私の研究について、詳しくお知りになりたい方は、図書館の小樽商科大学

学術成果コレクション Barrel からダウンロードして読んで下さい。

まだ、朝、寝ぼけて目覚めて、「あっ、今日の講義の準備は……」などとハッとすることがあるのですが、ああ、もう大学に行って授業しなくていいのだと思うと、とても解放されて、自由になった気がします。皆さんは、「1、2年もしたら退屈してしまうよ」と言われますが、この気分が続くかぎり、この自由を楽しみたいと思っています。

私は、その時々で、怒ったり、悲しんだりすることもありましたが、生まれ故郷の、小樽商大で過ごした23年間の職業生活は、大変、幸せなものでした。これまでの職業生活の中での経験を、そんな風に「幸せだ」と感じさせてくれた皆さんに、そして、この「幸せだ」を築く上でのスタート・キャピタルを与えて下さった友人、知人、身内の皆さんに本当に心から感謝申し上げます。

そして、57歳で先に旅立ってしまったマールブルク大学での学友
Jutta Weber-Bensch に特別の感謝を捧げます。